書評

李小江

『女に向かって－中国女性学をひらく』

（2000　インパクト出版会　269P　ISBN4-7554-0099-6 C1036　2,000円＋税）

藤枝澪子

本書は原題＜走向女人—新時期婦女研究紀実＞（河南人民出版社、1955年刊）の翻訳である。訳者秋山によれば，李小江は中国に「婦女研究」すなわち女性学を創設した人で、その女性学創設運動の歩みを自ら語った自伝的エッセイである。

ところで、まず最初に評者である私の立場を明らかにしておく必要があるだろう。中国の女性研究については私は知識も情報も全く持ち合わせていない。李小江という名前はもちろんのこと、彼女が中国女性研究のパイオニアであることも、今回の書評の依頼を受けてはじめて学んだというのが実情である。したがって、中国女性研究に関して何かを語る資格は、ないというのがほんとうのところである。ただ、中国との個人的関わりという点からすれば、皆無というわけではない。たとえば、子ども時代，つまり「日支事変」とよばれていた戦争中，父親が転勤・転職族のはしりだったせいで、10歳まで中国各地を転々としていた。戦後は，70年代末—今思い起こせば「経済改革・対外開放」の政策的大転換の起こった年にあたる—に、日中友好のある公式代表団の一員として中国を訪問し，子ども時代の一時期を過ごした家を北京で探したりしながら、解放後の中国の状況，人々の暮らしを垣間見る機会をもったりした。また、女性学を含むいくつかの国際会議の場で，中国政府の公式の立場にたつ代表の方々と接する機会をもったこともある。しかし、こと中国女性学の状況、とくに民間の動きということになれば、ここで私に語ることができるのは、あくまで本書に即してであることを、あらかじめお断りしておかなければならない。

それにもかかわらず、この書評をお引き受けする気になったのは、一読して著者李小江の強靭な精神力，剛毅ともいえるパーソナリティーに惹かれたからにほかならない。陰に陽に様々の政治的圧力を受けながら，時には柳に風と受け流し，時には気迫をもって抗しつつ、中国に女性研究の道を切り拓き，正当な研究分野としての確立をめざして運動の先頭に立つ李小江のすがたは、その議論の内容に対する賛否はともかくとして，感動を呼び起こさずにはいられないのである。

さて、中国の女性研究をめぐる状況で特筆すべきは、解放後に起こった政治的，社会的変動の激しさ，その振幅の大きさにあるといえよう。

李小江は1951年の生まれ。ということは、200年にわたる被侵略の歴史（その中で日本も明治以来，侵略の刻印を押しつづけたことを忘れるわけにはいかない）に終止符を打って，中華人民共和国が成立した年の2年後に当たる。1966年，15歳の時には文化大革命が始まっている。10年にわたる文革の時代，「女は天の半分を支える」「男の同志にできることは女の同志にもできる」などのスローガンに文字どおり“洗脳”されて、若い女性たち，とりわけ李小江のような勝気で誇り高い女性たちは、“女であること”を全否定して，男に一体化し、男並みになることが“男女平等”になることだと信じた。李小江は書いている

彼女にとって、女であることの認識は「性」の目覚めと同時にやってきたが、それは「極端な女性蔑視」と「女とは決別しようという決心を伴った」と。ところが、1976年に文革が終息すると、振り子は反対側に大きく振れ、79年からは国家政策の大転換により、市場経済化の大波に翻弄されることになる。日本も戦中から戦後にかけての振幅は大きかったが、中国のゆれ幅はさらに大規模なものだった。

文革がおわり、大学院に入学して欧米文学研究に取り組み始めた李小江は、やがて大学の講師となり、また多くの男性講師を差しおいて助教授に破格の昇進をする。すべては順風満帆に見えたまさにそのとき、彼女は歴史的・社会的に刻印された「女」とは何者かという問いに直面することになる。

それまで男に自分を擬していた彼女に不意打ちをくらわせたのが、恋愛、結婚、そして子どもの誕生という女としての個人的体験だった。「こうしてわたしは落とし穴に落ち込んだ。歴史的な女の落とし穴に。」夫と子ども、家

事と家族・・・これらすべてが、それまでと同じ「意志、独立性、行動様式や価値基準」と対立するものに転化した。「自覚的にこの運命を背負うことをきめたとき」、彼女は新たな落とし穴に落ち込んだ自分を発見する —「二重負担、二重役割、二重人格という現代女性の落とし穴に。」続けて、彼女はこう書いている。

女として生きるのはどうしてこんなにも苦しく、屈辱的なのか。男女平等の時代において、女はなぜ今もなお疲れ果て、抑圧されているのか？生活はわたしに男女の差異を正視することを教えてくれたが、その差異がなぜ今日まで延々と続く「男強女弱」の価値を定めることになったのか。女と生まれたからには女の運命を受け入れざるを得ない。それは、堂々とひるまず背筋を伸ばして女という性をもつ自分を正視すべきだということだ。その価値は社会の歴史の中で失われ、社会的価値の秤の上ではマイナスになっている—わたしはそれを取り戻したいと思った。学問のためでなく、自分を取り戻すために。」(傍点引用者)

学問・研究で業績を残そうといった私心、功名心からではなく、自らのアイデンティティ・クライシスを乗り越え、誇りを取り戻そうとして女性研究の道にのめりこんでいった李小江は、1983年、最初の論文「人類の進歩と女性解放」を発表。これを皮切りに、つぎつぎ論文を発表するとともに、85年、民間の女性学研究団体「河南省未来研究会女性学会」を設立、同年、鄭州大学に正規の講座として「女性文学」を開講、87年には鄭州大学に女性学研究センターを設立するなど、目覚ましい活動を展開していく。

ところで、複雑かつ大規模に変動する中国という環境の中で、李小江が渾身の力を傾けるのは、強い民族意識に裏付けられた「中国の女性運動」「中国の女性研究」、つまり女性運動、女性研究の土着化である。このことは本文中にもたびたび言及されているが、付録1の「中国における新時期の女性運動と女性研究」に明確に述べられている。「新時期」とは、1978年から1993年末までの期間を指し、李小江はこの時期を段階ごとに区分して、それぞれ特色を抽出したうえで、「主な成果と不十分な点」として新時期女性運動全体の特徴を簡潔にまとめ、その最後に「ひとつの突出した特徴は分離」であるとしている。そこに挙げられているのは、伝統的女性解放理論からの分離、伝統的人文科学の規範からの分離、女性が国家によって形作られるという伝統からの分離、そして「西方フェミニズム運動から距離をおく」ことである。

このような一連の分離と、西方フェミニズム運動からの距離がなかったら、新時期の相対的に独立発展した、民間性と土着化を主流とした女性運動はありえなかった・・・

訳者も「あとがきにかえて」の中で「フェミニズムに対する李小江の理解は、われわれから見ると偏っているのではと思われる点があ」ると述べているが、確かに「西方フェミニズム」についてはかなりの誤解があるようだ。しかし、11億の民、その半数が女性、しかも多民族、多宗教、多言語、広大な国土、地政学的複雑性、政治的状況——こうしたきわめて中国的状況の中で、「西方フェミニズム」—その理解が偏ったものであったにせよ—の影響をできるだけ排除しようとしたのは、妥当な選択だったのかもしれない。また、中国が外の世界に対して長期にわたって閉鎖状態にあったこともかかわっているだろう。しかし、彼女が主張した"男女の差異の強調による平等の実質化"は、現代の日本を含む「西方フェミニズム」世界では、生物学的決定論、性別特性論、機能平等論、本質主義等として大いに議論を呼んでいる問題である。しかし、この点もまた、中国内部の自由な論争によって克服されるべき事柄だろう。

ただ、「西方フェミニズム」が西欧近代工業文明の産物であるというのなら、抽象概念としての"母性"もまたしかりである。しかし、李小江は、「西方フェミニズム」には強い抵抗を示しても、「母性」概念はあたかも自然の摂理であるかのように扱っている。ある女子大学院生から「あなたは中国のボーヴォワールだといわれている」と聞かされたことをめぐる彼女の反応が興味深い。

わたしはシモーヌ・ド・ボーヴォワールではない。なぜならひとりの母親だから。わたしは母親にならないで母性を貶めるいかなる言論も容認できない。・・・わたしは結局、わたしの精神上の恋人は生命と母性を象徴する大自然だけであり・・・わたしは一人の普通の中国の母としての生涯から、中国女性研究にむかっていったのだ。(傍点引用者)

何を"土着"とし、何を"外来"とするのかは、それほど単純な問題ではないことを示す好例とはいえないだろうか。なお、秋山の訳文は、独特の癖を持つと思われる原著の文体をたくみに日本語に置き換えて、読みやすくなっている。

(ふじえだ・みおこ　京都精華大学名誉教授)